

の Legimitat が、当該社会の人々がそれに「帰依」している、ある種の「神聖な」もの (Heiligkeit) への基礎的な〈信仰〉や、〈献身〉に支えられて、はじめて成立していると指摘する（『政治と宗教』創文社、二〇一〇年）。「神聖性」(Heiligkeit) も「神皇正統」の「道」を考える上で（特に垂加派 重要な分析概念である。またウエーバーは、自ら後に撤回することになるが、一九一七年の講演「国家社会学の諸問題」で被支配者の意思から引き出される支配、すなわち民主制の正当性を「第四の類型」として措定した（詳細は佐野誠「マックスウエーバーの講演「国家社会学の諸問題」」（一九一七年）をめぐって——国家社会学と正当的支配の四類型」、『法制史研究』五七、二〇〇七年）。水戸学では安積澹泊のように、人心の帰趨を神器の軽重と関連させて、皇統における正統論を皇室内部の相統論ではなく、「天下の公論」として昇華させようとする思想もある（拙稿「水戸学と「正統」」、金時徳・濱野靖一郎編『海を渡る史書——東アジアの「通鑑」』勉誠出版、二〇一六年）。こうした被治者の合意（井上達夫氏の議論を用いれば敬讓 (deference)）と「正統」とを結びつける言説の流れは、大正・昭和で流行した尊王主義と民本主義を合一化する思想にも継承されていく。現代の皇位継承問題を考える上でも考慮すべき問題であろう。

（中央大学准教授）

丸谷晃一著

『伊藤仁斎の古義学』

——稿本からみた形成過程と構造』

（ぺりかん社・二〇一八年）

阿部 光磨

本書は、二〇一五年に逝去した丸谷晃一氏の業績が、氏の研究生活と不可分の存在であった「荻生徂徠研究会」（徂徠研）において編集された論集である。著者畢生のテーマは、現存する伊藤仁斎自筆の稿本資料を用いた思想構造の分析であった。その成果としての研究論文九篇が主題と執筆年代を踏まえて三部に編成され、更に知己たる徂徠研の面々によつて解題、解説等のほか、故人を偲ぶエッセイも多く寄せられ、それらが一連の論攷の背後にある著者の関心や読書範囲を、その人柄とともに伝えている。具体的な構成は以下の通りである（各論文の発表年と、解題等の執筆者名も記した。敬称略）。

第一部

第一部解題（高山大毅）

伊藤仁斎における「同一性」批判の構造——人我相異論の形成過程（一九八六年）

伊藤仁斎における「性善」論の構造（一九九九年）

伊藤仁斎の「情」的道德実践論の構造（一九九二年）

第二部

第二部解題（高山大毅）

伊藤仁斎における「古義字」的方法の形成過程——『孟子古

義』諸稿本における「至大至剛」の解釈をめぐって（一九九一年）

伊藤仁斎『論語古義』里仁篇・〈参乎〉章の注釈の成立過程
に関する考察——道德論における「情」の構造（一九九一年）

伊藤仁斎における「道」秩序の構造（一）（二〇〇一年）

伊藤仁斎における「道」秩序の構造（二）——「道」秩序と「野

狐山鬼」（二〇〇二年）

第三部

第三部解題（高山大毅）

伊藤仁斎の人間観——『孟子古義』諸稿本を中心にして（一九八三年）

伊藤仁斎の人我相異論の成立過程——仁斎の人間観と道德論
をめぐって（一九八四年）

解説（相原耕作）

コラム 丸谷晃一さんと私——その研究と思ひ出（ケイト・

ナカイ／田尻祐一郎／菅原光／片岡龍／大久保健晴／高熙卓

／末木恭彦／荻部直）

跋にかえて——丸谷晃一氏の経歴および研究業績（澤井啓

二）

二

仁斎研究における資料環境の特殊性として、膨大な自筆稿本群の存在があり、右の各論攷は著者がそれらと向き合う道を選び、そこに分け入り、格闘する中で生み出された。この研究方法が本書を特徴づけており、副題に「稿本からみた形成過程と構造」と付される所以である。

周知に属するかも知れないが、仁斎は生前、著作の出版には踏み切らず、終生、手許の原稿に手を入れ続けた（歿後に嫡子東涯らが整理、公刊した）。黒、朱、青の筆によつて書き加え、或いは削除し、余白が尽きれば修正を反映した新たな稿本を作成し、更に修正を重ねる。推敲に類するものもあれば、大幅な変更もある。自ら絶対的な典拠に選択した語孟二書に即した主著『論語古義』と『孟子古義』、自身の文脈で構成した『童子問』や『語孟字義』等、いずれの著作においても右の姿勢を貫いたのである。そして修正を施しては更新した稿本群が伊藤家において継承され、天理大学附属天理図書館に現存する。仁斎が対峙し続けた『四書集注』も、朱子は晩年まで修正し続けたと伝わるが、その修正過程は他の著述や発言録での言及からしか窺えない（土田健次郎「朱熹『論語集注』全訳注を刊行して、『日本思想史学』第四七号、二〇一五年）。これに対して言え

ば、書き込み尽くして更新された稿本も保管された結果、仁斎の場合は修正過程の多くを具体的に辿ることができる（先に挙げた主要著作の稿本もそれぞれ四種以上現存する）。その思想形成の過程を検証し、問題意識の所在に迫ることができるのである。だが、著者の選んだ稿本研究の道が全く容易ならざるものであったことも、本書「解説」等に縷々語られる。

その困難の第一は、各論攷において具体的に示される通り、仁斎による加筆修正の過程が決して晩年の思想へと真っ直ぐに突き進むものではないことによる。仁斎が『論語古義』各巻冒頭に冠した「最上至極宇宙第一」の八字の削除と加筆を繰り返したことは有名だが、加筆箇所は削除、削除の撤回といった試行錯誤は稿本群の随処に見られるのである。そこに何を見出すかが問われる中で、著者は仁斎の思想的特徴とされるものにも、初期の稿本にまで遡れるものと、比較的後の修正の中で生み出されたものがあることを指摘する（一四九頁、一五〇頁）。後述する通り、思想体系の軸、その核心を見極める上で欠かせぬ視点である。

また著者が、各論攷の主題に応じた特定の章の変遷を取り上げつつ、他の箇所における修正との連動状況、或いは先行する稿本での修正内容を参照し、縦横の論証に腐心している点も、稿本研究とその成果報告の難しさを示している。門人の林景范が筆写した所謂「林本」が主に仁斎生前最終の稿本とされるが、それは次の稿本作成に至る前に仁斎が臨終を迎えたことによ

るのであって、「林本」に至って脱稿した訳ではない。つまり、そこに至る迄の稿本も、試行錯誤の中にあるうとも、いずれもみな「古義」、彼にとつての「本来の儒学」を追究した成果なのである。稿本群の活用によつて可能となるのは、同一著作の縦断的検討とともに、思想形成過程の著作横断的検証であるということは、十分に留意されるべきであらう。

稿本研究の困難さについてもう一つ加えておくならば、それは稿本資料の利用環境にある。天理図書館に所蔵される自筆稿本群は、一九四八年に一括して重要美術品の認定を受けており、現在、原本は公開されていない。発行された影印本の類も無いので個々に写真撮影を依頼するよりないのだが、各稿本の書き込み等が誰の筆によるものかを写真で判別することは至難であり、筆跡の判定など各稿本の位置づけは『古義堂文庫目録』（天理図書館叢書二一、天理大学出版部、一九五六年）の見解に拠るほかはない。同目録は稿本研究の基盤を成す偉業なのだが、それでもやはり、自身では原本を披見できないことによる一抹の不安を抱えながら進めるよりない方法なのである。だが、稿本群の存在と価値が認識される一方で、それを手にする時点で一つのハードルがある（具体的内容を知ることなく撮影を申請せねばならない）現状が新たな参加者を遠ざけているならば、この手法の実際を知る為にも、著者使用の写真版が学習院大学に所蔵され、閲覧に供されているとの情報（三三八頁）は有益と言えよう。

思想分析における著者の一貫した関心は、朱子学に所謂「本然の性」を否定した仁斎が如何に自身の人性論を構築したかの解明にあり、第三部所収の両篇での探求が、まずは第一部の第一論文として結実する。まさしく稿本群の考察を進める中で、朱子学に対する徳の外在化として知られる仁斎の持論「四端の心」についての『孟子』の語を「仁義を以て其の性に名づく。性の名に非ず」と解する晩年の常言が『孟子古義』現存最古稿本の書き入れにまで遡れることが示される（二五〇頁）。一方、著者の所謂「人我相異論」は、後年の著作『童子問』での摸索の中で仁斎が生み出したものとする。この「人我相異論」を、著者は「同一性批判だけの段階を乗り越えるための次の段階として、「本然の性」を成り立たせている朱子学的思惟方法を克服しなければならないという考えを展開させた」（二三頁）その成果と位置づけるが、思想の軸となる主張がまず先行し、それを機能させる議論が後から形成されたとの指摘は、思想体系内における主従の関係を説明する有力な手がかりたり得よう。稿本研究が、仁斎の問題意識に即した理解を企図する上で欠かせぬ役割をもつことを示している。

また「忠信」と「忠恕」を基礎とする仁斎の道德実践論の実際を描き出した点も、著者の業績として特筆しておきたい。仁斎が「恕」の解釈を朱子学の「己を推す」から「人の心を付度

す」（「付度」は『詩経』に典拠をもつ語である）へと改めた点はたびたび注目されてきた。著者は「忠恕」解釈の誕生過程を第二部第二論文にて論じた上で、第一部第三論文では「忠信」にも目配りし、そのはたらきを、受動的な反応としての「情」を制御し、他者に対する適切な態度として発現することと表現する。それ故に他者の事情を斟酌し、是認する「忠恕」と両輪たり得ると指摘し、両者の実践を「外在化された客観的規範としての「仁義礼智」を、道德実践主体が人間関係のなかで自己の感情、および態度として確立・維持する営為」（一二二頁）とまとめる。これによってこそ、人は眼前の社会に自覚的に参加できるのである。『論語』所載の個別具体的な事例を、その「道德実践の手本」、「一種の典型的行動様式」（二一五頁）と評する点も、個々の『論語』学習が如何に道德実践に資するかを示すものとして分かり易い。

四

仁斎の「下愚」解釈をめぐるでも、著者は独特の見解を提出している。最後にこの件と、その背景にある思想の把握方法の問題に触れておきたい。

「上知と下愚とは移らず」（『論語』）に見える「下愚」について、朱子学では『孟子』の所謂「自暴自棄」、すなわち自ら向上を拒む者を「下愚」に当てる。仁斎はこれを批判し、「億万人中の一二のみ」ながら存在する先天的な四端の心の欠落者が

「下愚」であるとの解釈を示すとともに、具体的な古代中国の悪人を該当者として挙げた。そして、かかる先天的欠落者については「置きて論ぜず」と言うのだが、著者はこの態度を冷淡と評して強調する。そうした欠落者が現実存在することを示す世界説明の言として解する見方である（第一部第二論文）。一方、この「下愚」解釈の問題については、著者の当該論文に先んじて、次の見解も世に問われていた。すなわち「億万人中の一二のみ」ながら欠落者が存在するとした上で、その該当者を固有名詞を挙げて確定してしまうことで「あらゆる人々を移らざる」「下愚」から解放するための装置」としたと捉える見方である（豊澤一「伊藤仁斎における「性善」の意義について」、竹内整一ほか編『日本思想史叙説』ペリカン社、一九八二年）。対蹠的な理解に至る分水嶺は、自身が発する言説の効果を期した思想的主張として仁斎の言を捉えるか、世界説明として捉えるかにあると言えよう。

既述の人性論の問題においても、著者は「本然の性」を否定した結果、仁斎は新たに道徳的根拠を位置づける課題を背負い込んだとし（二六頁）、彼の思想体系における「性」の脆弱さを強調し続ける。そして「朱子学のなかで重要な位置を占める「性」の価値を貶しめ、それに反比例するかのように道徳的実践における「教」と「学」を重視した」（二二頁）と表現するが、仁斎本人は、その「性」に「学問の綱領」としての位置を与えており（『童子問』巻上・第二章）、「性」と「教」との関

係を車の両輪にも譬えている（同・第十八章）。仁斎その人の認識と著者との間には些かの齟齬があるように見受けられるのだが、これも仁斎の言説を世界説明と捉えるのか、或いは効果を期した主張と見るのかという相違に起因すると思われる。

仁斎は「自暴自棄」を「下愚」から引き離すが、その一方で「自暴自棄せざる者は千百の一二のみ」（同・第五章）と、それが世のほとんどの人の姿であると言う。先の豊澤氏もこの記述については仁斎の認識、世界説明の言であると捉えるが故に、仁斎の見る人間像を「聞く弱い存在」であると評する（前掲論文）。だが、これも主張として捉えた上で、「性善の説は仁義の己が固有たることを明らかにすと雖も、而れども其れ実に自暴自棄の者の為に之を發す」（『童子問』巻上・第五章）との仁斎自身の語、すなわち性善説を発した孟子の狙いは、世界説明ではなく教導にあるとする仁斎の見解と接続すれば、「自暴自棄」を一部の者に限定しないことで、性善説に普遍的な教導力をもたせていることが窺えよう。著者が指摘する「性」の脆弱さについて、脆弱であるかのように説く点に「人々に学を勧めるための思想戦略」を見出す見解が提出されている（山本正身『仁斎学の教育思想史的研究』慶應義塾大学出版会、二〇一〇年、三九四頁）。これも効果を期した主張として、仁斎の言説を捉えたものである。

右を踏まえた時、著者の所謂「人我相異論」が後から形成された議論であるならば、仁斎による人間の個性性の強調、他者

との隔絶の強調も、人間観の吐露に始まる世界説明というよりも、他者との隔絶を乗り越える為の道德実践へと導くことを企図した主張として捉えられるのではなからうか。それが、或いは著者の言う朱子学的思惟方法の克服の先にある、仁斎の狙いなのではないかと愚考する次第である。

結

本書を通読すると、著者の問題意識と研究方法の展開の過程も窺われ、よき理解者の手で編まれたことが察せられる。稿本研究に生きた著者の業績は、著者自身の軌跡を示す構成となつて、改めて公刊されたのである。

著者は本学会の監事も務められ、評者の幹事在任中にも会計監査の労をおとり下さった。擱筆に当たって、改めてその冥福を祈りたい。

(早稲田大学非常勤講師)

板東洋介著

『徂徠学派から国学へ——表現する人間』

(ペリカン社、二〇一九年)

前田 勉

1

近年、思想家の顔が見えない思想史研究が多いなかで、本書は荻生徂徠と賀茂真淵という「畸人」の姿が浮かび上がってくる作品である。もちろん、思想史研究には様々な方法があつてよい。思想家個人の生と思想を切断し、言説空間において思想をみる方法もある。また、同時代の社会のなかで生きて悩む思想家の意識を内在的に理解する方法もある。そのなかで、いささか大勢に抗うかのように、本書は後者の内在的理解の方法によって、倫理学の立場から徂徠学と国学の賀茂真淵という近世思想史の二人の巨人を描いた意欲作である。

本書は「はじめに」で、唐突に椎名麟三の小説『美しい女』の一節を引用し、「本書が念頭に置く問題系」(七頁)を語り出す。著者はそこから「大仰な思想」を忌避し、日々の仕事のなかで「物へじかに手をふれ、物を動かしたり変えたりすること」に拘泥する態度を読みとるのである。こうした経験的な「わ